

ナホム書1-3章 「正しい復讐にある慰め」

1A 仇に復讐する神 1

1B 恐るべき力 1-6

2B 主に対する逆らい 7-11

3B 御民を解き放つ方 12-15

2A ニネベの破壊 2

1B 散らす者の攻撃 1-2

2B 水の流れのような逃亡 3-10

3B 雄獅子を食い尽くす剣 11-13

3A 立ち向かう主 3

1B 辱めを受ける遊女 1-7

2B ノ・アモンの水の城壁 8-13

3B 蝗のように逃げる兵士と役人 15-19

本文

私たちは、主の復讐についての言葉を聞いて、どれほどの慰めを受けることができるでしょうか？しかし、受けることができる、いや正しい復讐があるからこそ、私たちの魂は深い慰めを受け、その魂は主の御心を行なうことに専念できる、というのが真実です。隣人を愛し、敵をも愛し、福音を宣べ伝え、いつ何時もぶれることなく、信仰を堅くもって前進することができます。新約聖書にも、主の復讐について、数多くが語られています。「2テサロニケ 1:6-7 あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。」それは、私たちに恐怖を与えるものではなく、むしろ患難の中にあってもなおの事、平安で私たちを守ってくれる砦です。

1A 仇に復讐する神 1

1B 恐るべき力 1-6

1:1 ニネベに対する宣告。エルコシュ人ナホムの幻の書。

「ニネベ」という町に対する宣告です。ニネベというのは、エジプトに次ぐ古代都市で、紀元前三千年頃から存在すると言われていました。聖書においては、あのニムロデが建てた町として創世記10章12節に登場します。ニムロデというのは、世にある権力者の始まりと言ってよい存在であり、彼がユーフラテス川下流地域のシヌアル地方に都市を建て、その一つがバベルです。そしてそこからバビロンが出て来ました。そして、それより北に、ティグリス川の流域がアシュル地方と呼ばれるところで、そこにも都市を建てていきました。その一つが、ニネベです。南のアフリカにはエジプト

文明があり、東のメソポタミアにはアッシリヤがありバビロンがあった、ということです。その特徴は、「主に対する反抗」です。ニムロデが主に反抗する権力者として名が知られていました。その性質は、弟アベルを殺したカインから始まっています。カインはさまよわないといけないと言われたのに、4章17節を見ますと「町を建てていた」とあります。それは、主ご自身に安全と安息を見いだすのではなく、人間の造った町、その城壁に安心感を見いだしていたからでした。いろいろな、セイフティーネットが設けられている日本社会も、まさにカインの建てた町の性質を受け継いでいます。

アッシリヤは、紀元前14世紀辺りから台頭し始めて、10世紀辺りから世界帝国として君臨しました。イスラエルとユダの王たちの歴史の中にも、アッシリヤが攻め入って来る様子は、何度となく出て来ます。一番、有名なのは701年にセナケリブが、ヒゼキヤが王となっていた時にエルサレムを包囲したことです。このようにニネベから、世界を嘗め尽くすように拡大し、663年には実に、エジプトのノ・アモン、テーベを攻め取るに至りました。しかし、612年にメディアとバビロンの連合軍によって、物の見事に陥落してしまうのです。しかも、その後、再建したことはありません。それほど長く続いていた都なのに、そこで急に無くなったのです。ここに、主の御心があります。ですから、ナホムが預言を行なったのは、アッシリヤがテーベを陥落させた663年から、612年までの間、アッシリヤが最大の領土を誇った後から、滅ぼされるまでの間に行ったと考えられます。

時代としては、ヒゼキヤの息子マナセ(696-641年)、アモン(641-639年)、そしてヨシヤ(639-608年)の頃ではないかと言われます。マナセが、バビロンに一時期捕囚の身となったことが歴代誌第二33:11-16に書いてありますが、この時のマナセはアッシリヤに徹底的に服従しなければならなかったことを示しています。けれども、ヨシヤが死んでしまった時、エジプトの王ネコが、バビロンと戦うためにカルケミシュに向かって北上した時に、彼がネコに戦いました。エジプトはカルケミシュにいたアッシリヤの残党を支援するために行ったのです。その時は既にニネベは滅んでいました。ナホムの預言は、確かにその通りになり、ヨシヤが大いに慰めを受けたのではないかと想像できます。また、マナセにも慰めになったかもしれません。極悪王であったマナセは、アッシリヤに捕え移されてから、悔い改めたことが歴代誌第二に書いてあります。その彼の魂を、ニネベの破壊の預言は癒したのではないかと思われれます。

ナホムは、「エルコシュ」の町出身であることが書かれています。どこにあるか、分かっていません。ちなみに、ガリラヤ湖畔にあるカペナウムは、「ナホムの家」という意味があり、そこが彼の出身地ではないかという推測もあるのですが、疑問であります。ナホムは、ユダに対して預言をしているので、エルコシュは北イスラエルではなく、ユダにあったのではないかと推測できます。いずれにしても、名もない町です。ですから、素性としてナホムは、テコアのアモン、モレシエテのミカと似ていて、何でもない人であったでしょう。そして、「ナホム」は「慰め」という意味です。主の復讐の言葉を聞いて、慰められるのか？ということですが、慰められます！

そして、この預言は、宣告でもありますが、「幻」でもあります。ニネベが滅ぼされていく時の描き方は、まさにその映像を見ているのではないか？と思われるほど、しっかりと描いています。今、イラクのモスルの郊外に、ニネベの遺跡があります。そしてバビロニア歴代誌など、ニネベ陥落の文書記録があります。それらを照らし合わせると、見事にナホムの預言が的中していることが分かります。私たちはとかく、影響力のある人々の言葉に左右されますが、主はしばしば、小さき者たちが忠実に語る聖書の言葉に、その預言を任せられることがあるということです。

1:2 主はねたみ、復讐する神。主は復讐し、憤る方。主はその仇に復讐する方。敵に怒りを保つ方。1:3a 主は怒るのにおそく、力強い。主は決して罰せずにおくことはしない方。

主が「ねたむ神」であることを話しています。主がイスラエルに民に十戒を与えられた時に、「あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神(出エジプト 20:5)」とご紹介されています。これは、私たち人間が抱くような、いわゆる嫉妬や妬みのような悪い感情とは別のものです。ご自分の造られたものに対して、無関心ではいられない、情熱を持っておられるということです。イエス様が、ラザロの死によってマリヤなど悲しんでいる人々を見て、涙を流し、心のうちに「憤り」を覚えた(ヨハネ 11:38)」とありますが、そこにある怒りや妬みのことを話しておられます。主が愛してやまない被造物、ことにご自分の所有とされた民が痛めつけられているのを見れば、そこに対して怒りを抱くという、熱い感情です。

そして 3 節に、「怒るにおそい」と言われているのに、力強く、罰せずにおくことはしないとあります。ここはとても大切です。ヨナ書で見ましたように、主は忍耐する方であり、決して人間の短気な性格のように怒り散らす方ではありません。しかし、それは弱さを意味していません。悪に対して、何もすることができない力のない方ではありません。力強い方です。多くの人が忍耐を弱さであると、勘違いしますがそうではありません。誰もが滅びず、悔い改めて生きることを願っておられます。しかし、悔い改めない者たちには必ず罰する方なのだということです。

1:3b 主の道はつむじ風とあらしの中にある。雲はその足でかき立てられる砂ほこり。1:4 主は海をしかって、これをからし、すべての川を干上がらせる。バシヤンとカルメルはしおれ、レバノンの花はしおれる。1:5 山々は主の前に揺れ動き、丘々は溶け去る。大地は御前でくつがえり、世界とこれに住むすべての者もくつがえる。1:6 だれがその憤りの前に立ちえよう。だれがその燃える怒りに耐えられよう。その憤りは火のように注がれ、岩も主によって打ち碎かれる。

私たちは、ここに書いてあるような自然の驚異を見る時に、主の力がいかに偉大であるかを知ります。イスラエルで、バシヤンとカルメルは肥沃です、バシヤンはゴラン高原で放牧に適しており、カルメルはぶどう園がありました。自然の大きな力を見る時に、私たちの考えがいかに小さく、人間の策略がいかに虚しいかを思います。主が、この力をもってニネベの立ち向かわれるのです。

ここで、「だれがその憤りの前に立ちえよう。」と叫んでいます。主の前に立つということは、自分に咎めがなく、大胆に立つことが出来るかどうか？ということです。咎めがあるならば、滅ぼされます。しかし、キリストがその御怒りを十字架で受けてくださいました。しかし、この方を拒めばどうなるのか？大患難において、屠られた小羊キリストを拒んだ者たちに対する怒りが、「小羊の怒り」という言葉で表現されています。「黙示 6:16-17 山や岩に向かってこう言った。「私たちの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまってくれ。御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。」

2B 主に対する逆らい 7-11

1:7 主はいつくしみ深く、苦難の日のとりでである。主に身を避ける者たちを主は知っておられる。
1:8 しかし、主は、あふれみなぎる洪水で、主に逆らう者を滅ぼし尽くし、その敵をやみに追いやられる。

ナホムは、ニネベに対する神の怒りの言葉と共に、主に身を避ける者たちへの慰めを書いています。この世において、アッシリヤのような残虐な行為を働く者が出て来ても、荒波のように世が騒ぎ立っています。そして、神を信じる者であっても、そうした災いから必ずしも免れるわけではなく、共にその災いを受けます。しかし、主に身を避ける者を主はご存知です。苦難の日の砦になっておられます。イエス様は、終わりの日の徴として、国が国、民が民に敵対すると言われて、それだけでなく、イエスの名のゆえに全ての人に憎まれるとも言われました。しかし主は、最後まで守ってくださるのです。

ところで、「あふれみなぎる洪水」とは、多くの場合、洪水のような軍隊を表しています。けれどもここは、文字通りにも起こったことです。ニネベの町が陥落する時に、大雨が降ったと言われます。ニネベの町の真ん中には、川が流れており、その氾濫によって城壁が崩れ始め、そしてメディアとバビロンの軍はその破れ口から入ったと言われています。

1:9 あなたがたは主に対して何をたくらむのか。主はすべてを滅ぼし尽くす。仇は二度と立ち上がれない。1:10 彼らは、からみつきたいばら。大酒を飲んだ酔っぱらいのようであっても、かわいた刈り株のように、全く焼き尽くされる。1:11 あなたのうちから、主に対して悪巧みをし、よこしまなことを計る者が出たからだ。

主に対する企みとあります。セナケリブによって遣わされたラブシャケは、エルサレムを包囲した時に、ヒゼキヤの神が他の国々の神々と同じように、アッシリヤに打ち勝つことはできないと言いました(イザヤ 36:20)。エルサレムの神を他の神々と同列に並べたのです。彼らはその前に、ヨナの預言などによって、イスラエルの神を知っていました。けれども、彼らは暴虐と略奪、残忍な方法によって国々を貪っていました。そのつけを支払ったのです。そしてここで、大酒を飲んでいるこ

とが書いてありますが、事実、攻め取られる前に彼らは酔いしれていたことが書かれています。そして、火によって焼かれることも、ニネベの遺跡には火によって焼かれた灰が発掘されています。

3B 御民を解き放つ方 12-15

1:12 主はこう仰せられる。「彼らは安らかで、数が多くても、刈り取られて消えうせる。わたしはあなたを苦しめたが、再び、あなたを苦しめない。1:13 今、わたしは彼のくびきをあなたからはずして打ち砕き、あなたをなわめから解き放す。」

先の 7 節と同じように、主が語られている相手を変えています。ユダの民に対して、語っておられます。ユダの民を残酷な方法で苦しめた彼らのことは、消え失せるのだと言われます。そして、主はアッシリヤにとって、ユダに懲らしめを与えられましたが、もはや彼らはあなたがたを苦しめない、あなたは解き放たれるのだと励ましておられます。

1:14 主はあなたについて命じられた。「あなたの子孫はもう散らされない。あなたの神々の宮から、わたしは彫像や鑄造を断ち滅ぼす。あなたはつまらない者であったが、わたしはあなたの墓を設けよう。」

こちらは、ニネベに対する言葉です。ここで、「あなたの子孫はもう散らされない」と言われているのは、一見、攻められることはないという希望の言葉のように聞こえますが、その正反対です。この攻撃をもって彼らは墓に入る、つまりニネベは二度と立たないということを教えているのです。これは驚くべき預言であり、紀元前三千年頃に始まり、世界に隆盛を極めていたこの大きな都が、あっけなく倒れ、倒れるだけでなく、死に絶えるというのです。大抵は、再建されてもよさそうなものですが、いいえ再建されませんでした。それで今に至るまで遺跡のみが残っていたのです。

そして、神々の宮の彫像や鑄造を倒すとありますが、アッシリヤ人はものすごい多神教信仰を持っていましたが、バビロンを発祥とする神々です。アシュルを始め、アヌ、ベル、エア。そして月の神シン、太陽の神シャマシュ、そしてイシュタルなど、自然にあるものを神としてあがめました。エルサレム陥落に失敗したセナケリブは、「ニクロスの宮で拜んでいたとき(イザヤ 37:38)」彼の息子たちが剣で殺した、とありますね。アッシリヤは、国々を征服する時、その国々の神々、その宮をことごとく滅ぼしていきました(イザヤ 36:18-19 参照)ので、今度は、神ご自身が彼らの偶像を滅ぼされました。事実、ニネベの発掘現場で、頭なしのイシュタルの像が見つかっています。

1:15 見よ。良い知らせを伝える者、平和を告げ知らせる者の足が山々の上にある。ユダよ。あなたの祭りを祝い、あなたの誓願を果たせ。よこしまな者は、もう二度と、あなたの間を通り過ぎない。彼らはみな、断ち滅ぼされた。

再び、主はユダの民に語っておられます。主が、たしかにユダに、そしてエルサレムに王となって来られたことを良い知らせと言っています。ここに、彼らはとてつもない慰めを得たことでしょう。アッシリヤの横暴と残虐は、主が復讐してくださるのです。主が消し去ってくださるのです。ですから、自分自身は主から命じられたこと、つまり良き知らせを伝えることに専念することができる、ということです。私たちの回りに、いろいろな世の波が押し寄せます。そして、それは不正であり、正さなければいけないことだと感じます。けれども、主が間もなくして彼らを滅ぼしてくださることを知れば、私たちは主から命じられたこと、善を行なうことに集中することができますのです。パウロは、ローマの教会の中に分裂やつまずきをもたらしている者がいることについて、こう言って励ましました。「ローマ 16:20 平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。どうか、私たちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。」

2A ニネベの破壊 2

1B 散らす者の攻撃 1-2

2:1 散らす者が、あなたを攻めに上って来る。壘を守り、道を見張り、腰をからげ、大いに力を奮い立たせよ。2:2 主は、ヤコブの栄えを、イスラエルの栄えのように回復される。..かすめる者が彼らをかすめ、彼らのぶどうのつるをそこなったからだ。

主がこれからナホムに、散らす者、すなわちメディアとバビロンの連合軍がニネベを攻め、破壊していく幻をお見せになります。ニネベに対して、しっかりと奮い立ちなさいと皮肉として語っておられます。当時、メディアの王キュアクサレスは紀元前 614 年にアッシリヤに対する戦いを始めます。そしてほぼ同時に、新バビロニア帝国を始めたナボポラッサル(ネブカデネザルの父)と合流し、同盟を結びアッシリヤを攻めます。アシュルの町を攻め 612 年にはニネベを包囲して攻撃を開始します。ものの三か月で陥落させています。そしてその中で、彼らの財宝を掠めて行きます。

そしてナホムは、その中で、ユダの民に対する主の言葉を伝えていきます。主が復讐をされ、ユダの民はその復讐に任せ、必ず栄光が回復する時が来るのだという慰めの中に生きるのです。これが、信仰者の見る目でありましょう。ローマ人への手紙 12 章にこう書いてあります。「12:19 愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」」

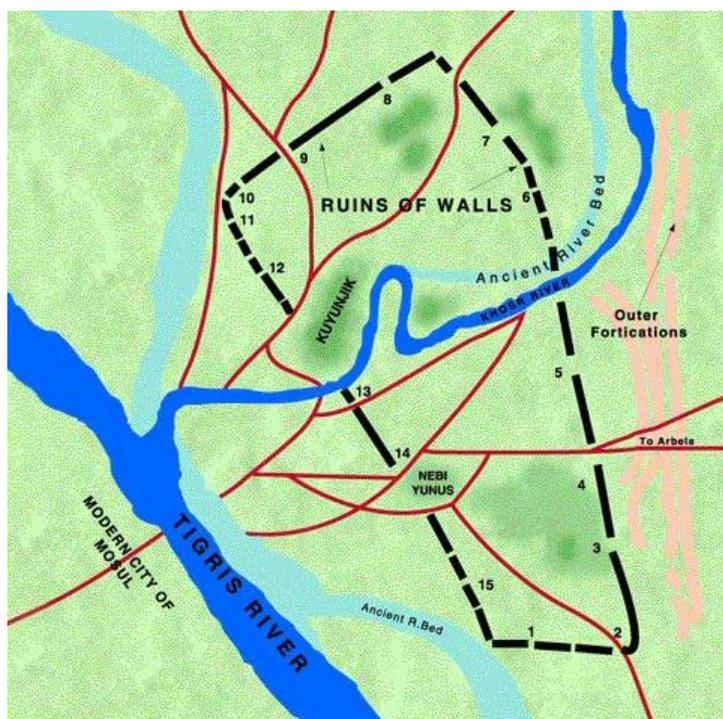
2B 水の流れのような逃亡 3-10

2:3 その勇士の盾は赤く、兵士は緋色の服をまとい、戦車は整えられて鉄の火のようだ。槍は揺れ、2:4 戦車は通りを狂い走り、広場を駆け巡る。その有様はたいまつのように、いわずまのように走り回る。

侵入したメディアとバビロンの姿です。ものすごい速さで走ってきています。「盾が赤く、兵士は緋色の服をまとい」とありますが、当時、バビロンやメディアはそのようにしていました。赤銅で造られたその盾は、太陽の光線で赤く輝き相手を威圧させましたが、それと同時に、自分たちが刺されて飛び散った血を相手に見せないためであったと言われます。

2:5 貴人たちは呼び出され、途上でつまずき倒れる。彼らはその城壁へ急ぎ、防柵を設ける。2:6 町々の門は開かれ、宮殿は消え去る。2:7 王妃は捕えられて連れ去られ、そのはしためは鳩のような声で嘆き、胸を打って悲しむ。

この「貴人」とは新共同訳のように「将軍」のことです。先に話しましたように、彼らは王から酒を支給されていて酔っ払っていました。それで「つまずき倒れ」ています。そして城壁を強固にするために防柵を設けていますが、これも遺跡で見つかっています。壁の煉瓦を壕に積み上げた跡が残っています。



そして、「町々」の直訳は「川々」であり、これがこの戦いの勝敗を決める重要な箇所なのです。ニネベの町は川に囲まれていた所です。今のイラクの北部に「モスル」という町がありますが、その隣にティグリス川があります。そこを渡るとすぐニネベの遺跡群があります。ティグリス川とその支流の間に城壁があり、そしてセナケリブは内側に水を取り入れるため水道を作っていました。また洪水を防ぐためにダムも町の外に造っています。メディアとバビロン軍が包囲をしていたところ、雨がたくさん降り、ティグリス川が氾濫したのです。そして乾燥した煉瓦で作られていた壁が、その水を含むことによって崩れ始めました。城壁の北西部分です。そこから連合軍は侵入しました。

2:8 ニネベは水の流れ出る池のようだ。みな逃げ出して、「止まれ、立ち止まれ。」と言っても、だれも振り返りもしない。2:9 銀を奪え。金も奪え。その財宝は限りない。あらゆる尊い品々が豊富だ。2:10 破壊、滅亡、荒廃。心はしなえ、ひざは震え、すべての腰はわななき、だれの顔も青ざめる。

ニネベにいる者たちが、慌てふためいて、どんどん町から逃げ出しています。そこには財宝が埋まっていた。それをメディアとバビロンの連合軍が奪い取ります。ニネベの町には、財宝と言われる財宝が莫大にありました。世界を征服して、いたるところで略奪し、また貢物として集めていたからです。しかし、遺跡で見つからないそうです。全て持って行かれました。そして略奪された後の状態ですが、ヘブル語では「破壊、滅亡、荒廃」が似た音の言葉になっていて、その音によって何かが砕け壊れる姿を表しているそうです (בִּנְיָה וְיִמְבֻּלָה וְיִמְבֻּלָה וְיִמְבֻּלָה *bûqâh ûmebûqâh umebul-laqâh*)。

ニネベの町は、並外れた難攻不落の町でした。周囲 13 キロもある巨大な防壁に囲まれ、その高さは 8-18 尺あったと言われています。完全に安全な町だったのです。それがものの見事に崩れ去り、人々の心がしなえ、膝が震え、腰が戦慄いたというのはその通りでしょう。しかし、主こそが苦難の時の砦であると私たちは学びました。これが人の造った物に安心感をもって神を拒む者たちに対する最後なのです。

3B 雄獅子を食い尽くす剣 11-13

2:11 雄獅子の住みかはどこにあるのか。それは若い獅子のためのほら穴。雄獅子が出歩くとき、雌獅子と子獅子はそこにいるが、だれも脅かす者はない。2:12 雄獅子は子獅子のために、十分な獲物を引き裂き、雌獅子のためにかみ殺し、そのほら穴を、獲物で、その巣を、引き裂いた物で満たした。2:13 見よ。わたしはあなたに立ち向かう。万軍の主の御告げ。わたしはあなたの戦車を燃やして煙とする。剣はあなたの若い獅子を食い尽くす。わたしはあなたの獲物を地から絶やす。あなたの使者たちの声はもう聞かれない。



アッシリヤは獅子を象った装飾で満ちていました。上半身が人間で翼のついた獅子の彫刻が有名です。そしてアッシリヤの王は、自分自身で、いかに自分が国々の王を倒したか、それを略奪したかを誇らしげに語りました。今、大英博物館にある碑文などに、ユダの王の名前も含める様々な王を倒し、貢ぎ物を持ってこさせたかを自慢している文章が残っているのを見ることができます。

主は、「わたしはあなたに立ち向かう。」と言われました。ニネベを攻めにきたのは、メディアとバビロンですが、しかし主が、そのことを引き起こしておられるのです。主が立ち向かうということは、本当に恐ろしいことです。しかし神が支配されていること、主権を持っておられることに反抗することは、神に敵対している、戦いを挑んでいることに等しいです。主は立ち向かわれます。しかし、ゆえに福音は、「神が和解してくださった」という言葉にあるのです。「2コリント 5:18-19 神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。すなわち、神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせ

ないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです。」その反対が、「わたしは、あなたがたと共にいる」という約束です。それが神の民に対して、絶えず約束されていました。それは、「ローマ 8:31 神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」という言葉そのものであり、敵対ではなく、その反対の見方になっておられ、私たちのために戦ってくださる方なのです。そして、キリストの十字架と復活は、私たちにその勝利者の立場を恵みによって取ることができるようにしていただきました。

そして、1章15節と、2章13節を見比べてください。どちらも、「見よ」という呼びかけから始まります。主を避け所とする道は、良き知らせを伝えている幻があります。主に反抗している者の道には、ここにあるように食い尽くされている幻があります。キリスト者は、この二つの幻をしっかりと見ていないといけません。良き知らせを携えるという幻。そして、神に敵対する人であっても、その人が滅びから免れるように、神の憐れみを祈り、愛し、祝福していく幻であります。

3A 立ち向かう主 3

1B 辱めを受ける遊女 1-7

3:1 ああ。流血の町。虚偽に満ち、略奪を事とし、強奪をやめない。3:2 むちの音。車輪の響き。駆ける馬。飛び走る戦車。3:3 突進する騎兵。剣のきらめき。槍のひらめき。おびたしい戦死者。山なすしかばね。数えきれない死体。死体に人はつまずく。

このようにニネベの町には、山となって死体が積み上がることとなりましたが、それは、まさに彼らが他の国々対して行なっていたことです。初めに「流血の町」とあります。先に説明したように、とてつもない残虐な行為をアッシリヤは働きました。そして「虚偽」、これは条約を結んでもすぐに破棄して相手を襲ったことを指しています。それから「略奪」と「強奪」です。これらの行為をやめなかったので、それで今、ここに書かれている生々しい攻撃を受けているのです。

3:4 これは、すぐれて美しい遊女、呪術を行なう女の多くの淫行によるものだ。彼女はその淫行によって国々を、その魅力によって諸部族を売った。

私たちは、黙示録の学びの17章で、バビロンが大淫婦と呼ばれているのを学びました。そこには、膨大な富があり、力があり、そして偶像礼拝に満ちている姿を表しています。それと同じことを、アッシリヤが行なっていました。ユダの国の王で、その売られていく姿が描かれています。アハズがいましたが、彼はシリヤと北イスラエルの攻撃から守られるために、アッシリヤに貢物を持って行きました。そしてアッシリヤの王はシリヤを倒しました。その後、アハズは王に謁見に行くために、ダマスコに行きました。そこにある神殿の祭壇を見ました。その見取り図をエルサレムに送り、それにしたがって主の神殿をダマスコの神々を祭ると同じように作り変えさせたのです。そして、アッシリヤ王のために、主の宮にある青銅のものを取り外し、また主の宮に造られていた覆いのあ

る道も、王の出入り口も取り除いたとあります(2列王 17:10-18)。こうやって、主に対する礼拝、主への献身の根幹になるところを、売ってしまっているのです。これが、世の力です。私たちの主に対する献身を、他の神によってなし崩しにしようとします。

3:5 見よ。わたしはあなたに立ち向かう。・・万軍の主の御告げ。・・わたしはあなたのすそを顔の上までまくり上げ、あなたの裸を諸国の民に見せ、あなたの恥を諸王国に見せる。3:6 わたしはあなたに汚物をかけ、あなたをはずかしめ、あなたを見せものとする。3:7 あなたを見る者はみな、あなたから逃げて言う。「ニネベは滅びた。」と。だれが彼女を慰めよう。あなたのために悔やむ者を、どこにわたしは捜そうか。

主が美しい遊女に対して立ち向かわれた後の姿です。裸をさらし、恥が露わにされています。汚物までかけられています。そして、誰も慰める者がいません。これだけ、自分たちが力をもって恐怖をもって、国々を従わせたのですから、いざという時に味方になるものがどこにいるのでしょうか？

ここに、福音による慰めと逆の状態をみます。福音は、キリストによって私たちが義で身をまとわせてくださいます。裸が覆われます。そして恥が取り除かれます。アダムが罪を犯した後に、裸であることを知り、エバもアダムも恥を抱きました。しかし、義の着物を着ているので、恥がなくなるのです。そして、慰めがあります。誰からも慰められない、究極の孤独ではなく、主が共におられ、主が報いてくださるという慰めがいつもあります。

2B ノ・アモンの水の城壁 8-13

3:8 あなたは、ナイル川のほとりにあるノ・アモンよりもすぐれているか。水がこれを取り囲む。その壘は海、その城壁は水。3:9 クシュとエジプトはその力。それは限りがない。プテ人、ルブ人もその助け手。

ニネベの過ちは、自分たちが無敵であると自負していたことです。ニネベはとてつもない大きい町で、考古学の間では、おそらく発掘しつくすことはできないであろうと言われているそうです。バビロンと同じく、その分厚い城壁の上には戦車が三両走ることのできる幅があり、15 の門があり、一つ一つに雄牛の石像がありました。そして城内外に、セナケリブが公園、植物園、動物園を作り、先ほど話したように水道設備も整えました。また、川の洪水から町を守るためのダムも建設したそうです。これは十九世紀に発掘されたのですが、それ以前は、ニネベは神話的存在で、聖書の批評家は笑っていたそうです。笑っているのは神ご自身で、人間はその一部を後で知るに至っているだけです。

しかし、彼らは 663 年に、エジプトにおける、もう一つの優れた古代都市ノ・アモン、ギリシヤ語ではテーベを征服していました。ナイル川の上流にある、観光地にもなっている有名などころです。

ここも倒れることはとても考えにくいことでした。ここにあるように、テーベも、川の水という自然の要塞がありました。けれども、それが事実倒れたことは、ニネベ自身がよく知っていたのです。王アシュルバニパル(エズラ記4章10節の「オスナパル」)がテーベを倒していたからです。「クシュ」はエチオピアとスーダンです、「プテ人、ルブ人」は今のリビアにいた人々で、彼らを傭兵としてエジプトは雇っていました。

3:10 しかし、これもまた、捕囚となり、とりことなって行き、その幼子たちもあらゆる町かどで八裂にされ、その高貴な人たちもくじ引きにされ、そのおもだった者たちもみな、鎖につながれた。

これがかつて、アッシリヤがテーベの人々に対して行なったことです。これと同じ仕打ちをそのまま、ニネベの者たちが受けるのです。

3:11 あなたも酔いしれて身を隠し、敵から逃げてとりでを捜し求めよう。3:12 あなたのすべての要塞は、初なりのいちじくを持ついちじくの木。それをゆさぶると、食べる者の口に落ちる。3:13 見よ。あなたの兵士は、あなたの中にいる女だ。あなたの国のもろもろの門は、敵のために広くあけ放たれ、火はあなたのかんぬきを焼き尽くす。

先ほど話したように、彼らは酒を飲んで酔っていました。それで、バビロンとメディアは彼らを初なりのいちじくのように簡単に食べ物にすることができました。また、兵士どもも女と等しかったのです。このように主は、彼らが無敵だと誇っていた力を、ことごとく弱めることによって裁きを宣言されています。

3B 蝗のように逃げる兵士と役人 15-19

3:14 包囲の日のための水を汲み、要塞を強固にせよ。泥の中にはいり、粘土を踏みつけ、れんがの型を取っておけ。

これも、遺跡の中で見つかっています。城壁の破れ口のところが、石と粘土の煉瓦が積み上げられていたのだそうです。

3:15 その時、火はあなたを焼き尽くし、剣はあなたを切り倒し、火はばったのようあなたを焼き尽くす。あなたは、ばったのように数を増し、いなごのようにふえよ。3:16 あなたの商人を天の星より多くしても、ばったがこれを襲って飛び去る。3:17 あなたの衛兵は、いなごのように、あなたの役人たちは、群がるいなごのように、寒い日には城壁の上でたむろし、日が出ると飛び去り、だれも、どこへ行くか行く先を知らない。

神の裁きとして、ばったがしばしば出て来ます。出エジプト記において、そうでしたし、ヨエル書にも出て来ました。ここでは、ばったが食い荒らすことにおける災いだけで使われているのではありません。これだけたくさんいるのに、瞬く間で飛び去っていくことの災いも話しています。つまり、これまでニネベで仕事をしていた商人は数知れず、ニネベを護衛していた兵士も数知れなかったのですが、王にもっとも結託し、また忠誠を誓っていたものたちが、ものの見事に逃げて行ったことを言い表しているのです。

3:18 アッシリヤの王よ。あなたの牧者たちは眠り、あなたの貴人たちは寝込んでいる。あなたの民は山々の上に散らされ、だれも集める者はいない。3:19 あなたの傷は、いやされない。あなたの打ち傷は、いやしがたい。あなたのうわさを聞く者はみな、あなたに向かって手をたたく。だれもかれも、あなたに絶えずいじめられていたからだ。

究極の裁き、復讐はアッシリヤの王本人に向けられています。この戦いの時の王シン・シャル・イシュクンは自殺したと言われています。王族で、アッシュール・ウバリト二世がニネベを逃げ、ハランを拠点にしました。そしてバビロンが後に追って来て、彼も死にます。ここで、牧者たち貴人たちが眠っているというのは、死んでいるということの隠喩です。そして、「癒されない」という言葉を繰り返しています。癒しは、神に対して反抗していること、罪を傷として捉え、その赦しのことを含めています。イエス様は、打ち傷を受けられることによって、私たちに罪の赦し、癒しを与えられました。そして、アッシリヤ王についての噂を聞いた者たちが、手を打ち叩いています。なぜなら、誰も彼を愛していなかったからです。恐怖でただ従っていただけですから、落ち目になったら、逆に喜ぶのです。最近のイスラム国の拠点の町、ラッカが制圧された後で、ラッカ市民が歓喜の声を上げていたのを思います。恐怖で抑えていたら、だれも彼らの倒れるのを哀しむ者はいません。

私たちは徹底的に、復讐ではなく祝福、憎しみではなく愛、力ではなく奉仕に、悪ではなく善によって打ち勝つ必要があります。けれどもその過程で、あきらめなくなる時があります。耐えられなくなる時があります。妥協したくなる時があります。けれども、しっかりと主が復讐する方であることを知ってください。これらのことは、主にお任せすることによって、私たちにしなければいけないことが見えてきます。キリスト者でさえ、主の御心ではないことに取り組ませる力が働いています。けれども、裁きは主のものです。主は正しく報いてくださいます。そこに慰めを得て、私たちの心をイエス様と同じ、罪を赦し、愛に満たされるように祈りましょう。